

資料涉獵余話

その60

日夏は「わたくしは、少青年期の五六年を赤門青年文士の空

夏之母・以しの弟で、飯田知久町樋口家の長男である。松本中学から第一高等学校、東京帝国大学文科哲学哲学科へと進学し社会学を修めた。典型的な秀才で、大学院に進みながら明治・國學院・仏教

の叔父樋口秀雄（龍峽）宅に身を寄せ、早稲田大学を卒業後、26歳の時、1916年に鎌倉に居を構えるまで、日夏はこの叔父の庇護下にあった。

この叔父龍峽は、日龍峽は、道徳主義・悟

性主義の立場から、雑誌『太陽』に「美的生活論を読んで橋生子に与ふ」を寄せ反論した。これ発端として1909年に文芸革新会を結成し、反自然主義運動を展開する。

をしてくるから、雑誌『太陽』に「美的生活論を読んで橋生子に与ふ」を寄せ反論した。これ発端として1909年に文芸革新会を結成し、反自然主義運動を展開する。

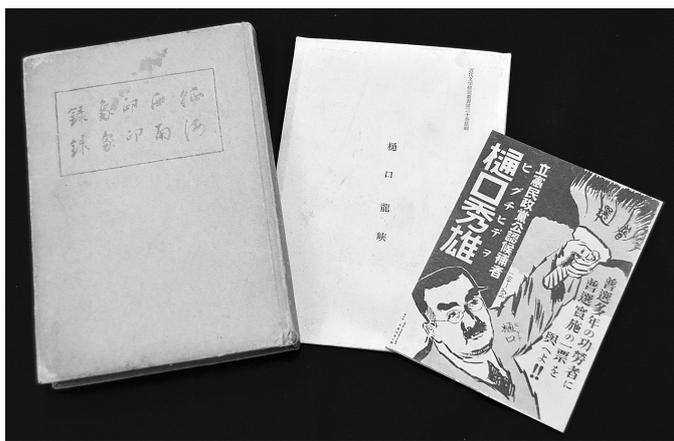
黄眠先生が行く 10 叔父龍峽樋口秀雄(上)

鳴 不 濁

文学者・評論家・龍峽が中学生に愛読された日夏歌之介に与えた影響は大きい。「わたくし

が中学生に愛読された日夏歌之介に与えた影響は大きい。「わたくし

酒の追加の征伐により、出入りしたようである。黄眠先生こと日夏歌之介が一代で日夏にな



遺稿集と選挙運動チラシなど (MSC蔵)

の文壇の知り合いには、この龍峽人脈が実に多い。

公衆社団法人南信州地域資料センターに寄贈された書籍の山の中には、龍峽が編集に尽力したと思われる『帝國文学』や、遺稿集『征西印象録・海南印象録』(昭和5年)などの資料も埋もれている。(続く)

＊好評発売中！
鳴不濁著『黄眠先生が行く 日夏歌之介残影』
(南信州新聞社刊)

